

研 究 結 果 報 告 書

中井竹山と他の近世日本知識人における『詩経』学の比較研究

所属： 淡江大学 日本語文学科
役職： 助理教授
氏名： 田 世民

本研究は、中井竹山と他の近世日本知識人における『詩経』学の比較検討を目的とするものであり、以下のような研究結果を得ることができた。

竹山は、朱子説を絶対化しがちな崎門派の偏狭な立場とは一線を画す一方、程朱の説を非難しあげつらう荻生徂徠の考え方にも反対している。竹山は『詩経』理解において、朱子学という大きな枠組みを前提にしつつも、それを無謬のものと認めず、諸家の説をも取り入れながら相対化すると云う立場を取るのである。

朱子の『詩経』学を相対化する点において、竹山の弟・履軒は竹山の立場と共通している。しかし、竹山が朱子学という枠組みの中に止まるのに対して、履軒はさらにそれを脱構築する方向へと進むのである。

具体的にいえば、履軒は『古詩逢原』において、朱子『詩集伝』の篇目に対して大幅の改訂を行うばかりでなく、自らの判断によって多数の詩篇を削る、いわゆる「刪詩」までしている。そして、履軒はその「刪本」を基に独自の『詩経』解釈を展開させる。その狙いは履軒自身が言うように、正に「一に会萃し、一家の言を為す」ことにあるのである。懷徳堂を離れて、自らの私塾で長年経学研究に沈潜し、その成果を「水哉館学」として世に出したことに、自負を以って提示しようとする履軒の姿を垣間見ることができるのである。

それに対して、竹山の『詩経』など経書に対する注釈は、あくまでも朱子説をはじめ諸家の説や自説をテキストに首書する、いわゆる「標注」という著述形式に終始し、単独の著作として完結することはないのである。竹山自身にそれを一書として纏める意志がなかったというよりは、経書理解のあり方として彼は敢えてそうした形を選択したと捉えるべきである。

研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等)

「中井竹山与中井履軒的《詩經》学比較」(中国語)・田世民・第四回日本研究年会・2013年11月9日・台北：国立台湾大学

論文 (題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等)

書籍 (題名・著者名・出版社・発行時期等)

『詩に興り礼に立つ——中井竹山における『詩經』学と礼学思想の研究』・田世民・台北：国立台湾大学出版中心・2014年4月